佳作

女たちの赤まんま

後藤　順

岐阜県

正月、母の作った、赤まんまのおにぎりがお雑煮の横に、家族に一つずつ。一年を健康にとの母の思いが詰まったものだ。

家の裏に五坪ほどの畑がある。日陰で作物の出来は悪い。そこに毎年母は小豆を植える。母は言う。「私は姑さんから、古い女が作るものだと教わった」。確かに、祖母が亡くなった翌年、母が小豆を作り始めた記憶がある。家族の誰に宣言する訳でもない。

鍬で畑を整地する。だが、農薬や肥料をしない。自然のままに、ただ雑草だけは取る。自然の摂理のとおり、小豆は虫食い、痩せている。母は念押す。「なすがままの小豆が一番おいしい」。赤まんまのおにぎりは、うす塩で、時に虫が入ったり、鳥が啄ばんだ跡がある。

以前、その畑をつぶして駐車場にしようとした。母の猛反対にあった。「ご先祖さまから引き継いだ畑は、この家を守って下さっている」との理由だった。

スーパーに行けば、艶やかで肥えた小豆が売っている。母が労力をかけるより安価でもある。それを母に向けると、終戦後の飢餓状態の生活を語り始める。一粒の小豆で、家族が諍うとの、今の飽食な生活では想像できない、母の瞳は涙で覆われる。

末期癌の母が病床で、妻の手を握り、懇願する姿を思い出す。「お頼みするね。あんたがあの畑を守ってや」。妻は頷き通しだった。余り嫁姑の仲が良くなかったのに、妻の顔は、この家の古い女へと変わった。

母の約束を妻は守った。しかし、母のものより、妻が作る赤まんまの小豆は、痩せてはいない。虫の痕跡もない。農薬の代わりに木酢を使い、肥料は貰い受けた鶏糞を使う。

ある時、妻が息子の嫁を裏の畑に呼び出した。「あんたの番がくる日がくるからね」。彼女はまだその意味を知らないようだ。